

## 国語

法学部・経済学部・経営学部・文学部・総合社会学部・国際学部・情報学部(英・国・数型)・短期大学部

〔一〕 次の文章を読んで、後の問い合わせ答えよ。解答番号は〔一〕の □ 1 から □ 13 までとする。

インターネット上に建立された墓、「サイバーストーン」と呼ばれるプロジェクトがある。発案者である松島如戒によれば、その発想の原点には、ヒトを除くすべての生命体は、生を終えたのち、生態系に還元されてゆくのに、ヒトだけが死後、墓というスペースを占有しつづけることが許されるのだろうかという疑問があった。発展途上国の人口爆発とそれにともなう食糧危機は「墓の爆発的受容」を意味し、食糧生産地が墓地に浸食されかねない。こうした問題意識から「お骨も墓石も墓地もない墓」サイバーストーンは誕生した。

それはインターネット上のホームページに墓を作り、サイバースペースに死者の記憶を残すというアイディアである。遺された者たちは、このホームページにアクセスし、故人を偲ぶ。<sup>じの</sup>サイバーストーンは墓地の用地不足を解消するばかりでなく、墓守のいない無縁墓が生じることを防ぎ、遺骨のエコサイクルを可能にする、と松島は言う。遺骨は高温焼却炉で灰になるまで焼かれ、土に返されるので、お骨を納める土地も不要になる。松島が調べたところでは、摄氏千度以上の炉で焼かれた遺骸、つまり焼骨にはDNAはもはや存在しないものと推測されるため、焼骨によって死者を識別することはできない。したがって、骨はすべて灰にしてしまい、自然の生態系に戻す代わりに、個人識別が可能なDNAを含む毛髪を採取し、御髪塚に長期保存すればよい。将来、遺伝子配列が完全にカイセキされたならば、御髪塚すら不要となつて、サイバーストーンにその人固有の遺伝子配列を記録するようになるかもしないと言つ。

サイバースペース内の墓に蓄えられるものが文字、音声、画像、映像からなるマルチメディア的な情報であるのと同様に、御髪塚に保存されるものもまた、DNAという遺伝子情報である。いずれにしてもそこでは死者が解読可能な情報に還元されうることを前提にしている。死者は □ A されるのではなく、あくまで情報として □ B されるのである。死者を個人として同定する情報のデータバンクが墓地に取つて代わる。肉体はすべて焼かれて灰にされ、自然に返されてしまうのだから、墓や墓地は原則的に無用なものとなる。

① 大胆な「墓革命」であるとともに、これは墓地という死者のための空間を都市から消滅させる、ひとつの長期的な都市計画の提案である。墓地のない都市——しかし、そんな都市が実現したとして、われわれ生者にとつて失われるものは何もないのだろうか。ジャン・ジュネは、そのような「都市計画」によって、われわれは「演劇」を失うだろうと言う。

urbanisme という奇妙な単語、教皇ウルバヌスの一人に由来するにせよ、あるいは都市といふものに由来するにせよ、それが死んだ者たちを気遣うことは、おそらく、もうないだろう。生きている者たちは、こつそりとあるいは公然と、死んだ者たちを厄介払いするだろう、人がハレンチな想念を振り払うように。焼却炉へと彼らを追いやることで、  
② 都市化された世界は、ある大きな演劇的な救助を、そしておそらくは、演劇そのものを厄介払いするだろう。都市の——おそらくは中心を外れた——中心である墓地のかわりに、あなたがたは、煙突のある、煙突のない、煙の出る、煙の出ない、諸々の骨壺置き場を持つことにならうし、また、死んだ者たちは、黒焦げの小さなパンのように黒焦げになつて、都市からかなり遠いコルホーズやキブツの肥料として利用されるだろう。

③ この異様なテクストがそこで書かれた土葬が支配的な文化において屍体の焼却がもつ意味と、火葬中心の文化のもとにおけるそれとが異なることには留意しなければならない。ジュネにとって屍体焼却は、都市の「中心を外れた」中心、つまり文字通りの中心には位置しえない周縁的な場所ではあっても、都市にとつて欠くことのできない空間である墓地の衰弱を物語っている。その衰弱が「演劇」という「救助」の喪失にキケツする。しかし、演劇の目的をキリスト教の暦の時間からの解放、すなわち「歴史的と言われているが実は神学的な時間から、私たちを逃れさせること」にあると考えるジュネは、土葬の文化的伝統に逆らい、「黒焦げの小さなパン」という「肥料」を生む火葬場に、演劇の新しい倒錯的な形態を見出すことになる。

とはい、もし火葬が——ソウゴンに、ただ一人の人が火焙あぶりにあつて焼き殺されるとか、都市あるいは国家がある別の共同体を、いわばひとまとめに厄介払いしようとするような——ある劇的な展開を見せるなら、火葬場は、ダッハウのそれのように、時間というものからは過去からも未来からも建築学的に逃れている、きわめてありうべき未来の姿をカシキし、煙突は清掃班の手でつねに整備され、この班の人々は薔薇色煉瓦造りの勃起し傾斜したこの性器の回りでリートを歌つたり、あるいはモーツアルトのメロディを正確に口笛で吹きならしたり、十から十二の死体をその火格子の上に一度に詰めこめる焼却炉の開いた口をさらに手入れしたりする、そんな演劇の一形式が永続化することになるだろう。

「ダッハウ」という固有名詞が示すように、死の生産工場としての強制収容所が、大量に、規則正しく、正確に反復する焼却こそが、神の受肉に始まり、最後の審判における復活の期待のうちに置かれたキリスト教的時間の支配下ではなく、過去も未来も欠いているという意味において、墓地なき時代の「演劇」なのだ。<sup>(3)</sup>ジュネによる演劇のこの過激な転倒に反映しているのは、ナチの強制・絶滅収容所における膨大な殺害屍体の焼却という犯罪行為が、復活の日に備えて身体を大地に埋め保存する文化に対して与えた衝撃であろう。

演劇は映画とテレビの出現以後の時代にあって変質せざるをえない、とジュネは言う。かつてそれは、政治的あるいは宗教的関心のもとに、劇的行為を教育の手段にしていた。映画やテレビがその教育的機能を受けた結果、演劇は空っぽになって純化される。では、こうして純化された演劇に残されたものとは何なのか。それは「場」である。そして、ジュネによれば、現在の都市で劇場が建設されうる「場」は「墓地」以外にはない。墓地に劇場が隣接するとき、あるいは墓地が劇場になるとき、観衆はそこを訪れるため、そこから帰つてゆくために、墓に沿つた道をたどらなくてはならない。ジュネがそんな劇場をめぐつて思い起こすのは、ローマかどこかに存在した、葬列に先んじて進みながら、故人の人生のパントマイムを演じたといふ、「弔いのものまね師」のことである。このものまね師から「演劇」は生まれる。

死者を埋葬する前に、棺のなかの死体を舞台の前景まで持っていく。友、敵、野次馬は、観衆用の場所に着席する。葬列に先んじていたものまね師は分裂し、大勢になる。彼は劇団になり、死者と観衆の前で死者を生き返らせ、再び死なせる。統いて棺は再び持ち上げられ、夜の夜中に墓穴まで運ばれる。ついに観衆は去っていく。

ジユネが演劇と呼ぶものの起源は死者の生の模倣ミメーションにある。この模倣によつて、死者を埋葬する前にもう一度生き返らせる営みが演劇なのだ。そこでは屍体もまた観客のひとりである。『リトレ辞典』によれば、表象、上演、代理をさす représentation には、「喪の黒布で覆われた空の棺」の意味がある。演劇とは 儀礼そのものの「ものまね」、すなわち代理にほかならない。

ジユネが指摘する埋葬と演劇との根源的な関係は、一八世紀末以降の近代ヨーロッパにおいてギリシア悲劇の神髄とされてきたソポクレスの『アンティゴネー』が、屍体の埋葬にかかる劇であつたことに表われている。この悲劇では、兄ポリュネイケスの屍体の埋葬を叔父のテーバイ王クレオンに禁止されたアンティゴネーが、その禁を破つた罰として、生きながら墓穴のなかに閉じ込められる。つまりそこでは禁止による埋葬の遅延と生き埋めによる早すぎる埋葬という、適切な時機を得ることのできない埋葬行為の障害が主題になつていたのである。

(中略)

古代ギリシア人は「生命」という言葉でわれわれが意味しているものを表現する單一の単語をもたなかつた。彼らは語源的には同一ではあつても意味の異なる二つの単語を使つてゐた。そのうちのひとつである「ゾーエー」は、あらゆる生命体について共通して存在する生命を表わし、もうひとつの「ビオス」は人間の個人ないし集団固有の特徴づけられた生の形式、生き方といつたものをさしてゐた。アリストテレスの『政治学』にもとづいてジョルジヨ・アガンベンは、古代ギリシアでは單なる自然的生命であるゾーエーはポリスからは厳密に排除され、再生産されうる生命としてオイコスの領域に限定されていたと言ふ。この二つの生命概念によつて語るならば、ポリュネイケスはビオスの終わりである死ののちにもゾーエーとしては生き

ており、そこにポリスとオイコスとの苛酷な衝突が生じたのである。

ミシェル・フーコーは『知への意志』において、古典主義時代以降のヨーロッパでは、権力のメカニズムがもはや君主がもつ生殺与奪の至上権によつてではなく、身体の規律と人口調整によつて生をくまなく取り込むテクノロジーに依拠するような「生<sup>ビオ</sup>-<sup>アーヴォワール</sup>権力」が現われた、と主張している。近代人とは「己が政治の内部で、彼の生きて存在する生そのものが問題とされているような、そういう動物」にほかならない。ここで言う生とは明らかにビオスではなく、ゾーエーである。種である身体、生物学的な身体の繁殖や誕生、死亡率、寿命などを制御しようとする「生<sup>ビオ・ボリティック</sup>政治」とはいわば、古代ギリシアにおいてはありえなかつたであろう、ゾーエーの政治である。単なる生命であるゾーエー<sup>(5)</sup>の政治化が近代を特徴づけている。

ポリス的生命としてのビオスと単なる生そのものであるゾーエーとの矛盾を埋葬という主題をめぐつて展開した『アンティゴネー』のうちに、ヘーゲルは、ゾーエーが属するオイコスを守る女の倫理とポリスを支配する男の法との対立を見た。本来、<sup>エ</sup>家族がおこなう最後の義務としての埋葬はポリスの関心事ではない。アンティゴネーの悲劇は、ゾーエーにかかる領域にポリスの政治が過剰に介入した結果の産物である。ヘーゲルの読解は、政治的空間へのゾーエーの取り込みに対するアンティゴネーの抵抗に倫理的な正当性を与えた。それは古代ギリシアの都市国家アテネが、この悲劇の舞台上で上演<sup>＝</sup>表象される対立関係を通して、ビオスとゾーエー、ポリス的広場とオイコスの暖炉との区別をおのれが政治空間の基礎的分割としていった過程を、模倣的に反復しようとする身ぶりだった。そして、そのようなヘーゲルの解釈の背後にはおそらく、ますます政治化されつつあるゾーエーという、生政治のテクノロジーによる生権力の支配の拡大があつた。ラカンがアンティゴネーに死の欲動の倫理を見るとき、この倫理が対置されているものもまたやはり同様に、人間を「生き<sup>、</sup>さ<sup>、</sup>せ<sup>、</sup>るか死の中へ廃棄する」生権力であろう。

（田中純『死者たちの都市へ』による。ただし、本文の一部を省略した）

問一 二重傍線部a)～e)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

	6	問 二 一 空欄	5	4	3	2	1
4	3	2	1	(e)	(d)	(c)	(b)
A	A	A	A	3	1	3	1
識別	記録	保存	埋葬	強制ソウカン カイソウ御札 キカン産業	辞職カンコク 証人カンモン	レンカ販売 ヒレン物語 キドウ修正	人工トウセキ インセキ辞任
B	B	B	B	4	2	4	2
解読	識別	記録	保存	ジユクリンの技 レンキン術	一朝イツセキ ジユクリンの技 レンキン術	移民ハイセキ ジユクリンの技 レンキン術	移民ハイセキ
				4	2	4	2
				ソウダイな計画 仮名を漢字にヘンカン	避暑地のベッソウ	キセイ緩和 キカ申請	一朝イツセキ
				勝利にカンセイをあげ	勝利にカンセイをあげ		
				に入る言葉の組み合わせと			

に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の 中から選び、その番号をマークせよ。

問三 傍線部①はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 墓地を無用にすることによって都市の人口問題を解消し、長期的な観点から食糧危機に対処する計画だから
- 2 弔いのかたちを刷新するのみならず、遺骸を生態系に還元するというエコロジー的な発想が原点にあるから
- 3 故人の痕跡をサイバースペースに移して土地を有効活用し、都市空間を大胆に再編するプロジェクトだから
- 4 死者が解読可能な情報に還元されうるという前提に基づいて、都市に不可欠な墓地を消滅させる構想だから

問四 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 土葬中心のキリスト教文化において、屍体の焼却は復活の日に備えた身体の保持を否定することになる
- 2 火葬中心の日本とは異なって、ヨーロッパでは屍体を大地に埋めることが都市計画の中に含まれている
- 3 キリスト教の文化的伝統からすれば、屍体を焼却することは自然の摂理に反する行為と認識されている
- 4 ヨーロッパでは墓地の用地不足や衛生面の問題が深刻ではなく、屍体を焼却する必要に迫られていない

問五 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

- 1 都市計画を意味する urbanisme という言葉を転用して、都市から墓地が消滅した後の演劇を構想している
- 2 土葬が支配的な文化において、その伝統にあえて逆らうことで演劇を宗教儀礼から解放しようとしている
- 3 ナチによる犯罪行為の衝撃を受け止めつつ、死者の復活に備えて火葬場における演劇の再生を図っている
- 4 屍体の焼却が演劇の喪失につながると考えながら、その極限的な状況に新しい演劇の形態を見出している

問六 空欄 10 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

10

- 1 哀の黒布の表象
- 2 生き返った死者
- 3 屍体を欠いた棺
- 4 空虚な墓の模倣

1 哀の黒布の表象

2 生き返った死者

3 屍体を欠いた棺

4 空虚な墓の模倣

問七 傍線部④についての説明として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 11
- 1 尸体の埋葬をめぐるボリス（都市国家）とオイコス（家）の対立が主題となつていてる
  - 2 死者の生を模倣的に反復することを通して埋葬と演劇の根源的な関係を具現していいる
  - 3 自然的生命の領域への権力の過剰な介入に対するアンティゴネーの抵抗を描いていいる
  - 4 生物学的身体と政治的身体の矛盾を家族の埋葬というテーマをめぐって展開している

問八 傍線部⑤にあてはまるものとして、最も適切なものを波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

- 12
- 1 ア キリスト教の暦の時間からの解放
  - 2 イ ナチの強制・絶滅収容所における膨大な殺害屍体の焼却
  - 3 ウ 死者を埋葬する前にもう一度生き返らせる営み
  - 4 エ 家族がおこなう最後の義務としての埋葬

問九 本文の内容と合致しないものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

13

- 1 生政治のテクノロジーの拡大は、死者を劣化しないデジタルデータに置き換えて保存する発想につながっている
- 2 都市から死者を厄介払いした先にある強制・絶滅収容所において、埋葬行為の演劇性は生政治の空間と結びつく
- 3 権力による禁止に逆らって兄を埋葬したアンティゴネーは、生権力の支配への抵抗者として現代的な意味を持つ
- 4 古代ギリシアの都市国家におけるような政治空間の基礎的分割は、近代の生権力の拡大によって浸食されている

〔二〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔一〕の □ 1 から □ 8 までとする。

行基菩薩はもと薬師寺の僧なり。俗姓は高階氏、和泉国大鳥郡の人なり。わかつて頭をそりて、はじめて瑜伽論を誦す。すなはちその心を明らかにさとりぬ。あまねく諸国にあそびて、人をして法道のりのみちをしらしめて、仏の道におもむけて、仏法をおこなひつとめとして、行基すぐる所には家にをる人なく、競ひいでてをがみたてまつる。あしき道にいたりては橋をつくり、堤をつきてわたし給ふ。よき所を見給ひては堂をたて、寺をつくり給ふ。畿内には三十九所、他国にも甚だおほし。その寺いまにあひつぎてさかゆる事、いまにたえず。

あまねく雨のしたにありき行きて、利益せずといふ所なし。ふるさとに帰る時、ある人々池のほとりにあつまりて、魚うをとりてくふ所あり。その前をすぐるに、いさめる人ひともとらへとどめて、なますをつくりて、あながちにすすめ、しひてまるらす。これをうけて口のうちにいれて、即ちはきいでたるをみれば、みなことごとくちひさき魚となりて、また池に入りつ。みる人おどろきて、戯れのととがをくゆ。かくのごとくにあやしく

(中略)

また天皇東大寺を作り給ひて、供養くやうじ給はむずるに、講師には行基菩薩を定めて宣旨せんじを給ふに、「行基はその事にたへずはべり。外国より大師來たり給ふべし。③それなむつかうまつるべき。」と奏すれば、供養くやうぜむとするほどに成りて、攝津國の難波なんばの津に大師のむかへとてゆく。即ちおほやけに申し給ひて、百僧をひきゐたり。次いで行基は第百にあたり給へり。治部玄蕃雅樂司等を船にのりくはへて、音楽おとを調はへてゆき向かふに、難波の津にいたりてみれば、人もなし。行基闊伽あか一具※あかをそなへて、そのむかへにいだしやる。花をもり、香をたきて、潮の上にうかぶ。みだれちることなし。はるかに西の海にうかび行きぬ。しばらくありて、小船にのりて婆羅門僧正、名は菩提ウボダといふ僧來たれり。閻伽またこの舟の前にうかびて、みだれずして帰り來たり。菩薩は南天竺なんてんじくより、東大寺供養の日にあはむとて、南海より來たれり。舟より浜によせておりて、たがひに手をとり、喜びゑめり。行基菩薩まづ歌をよみていはく、

※りやうぜん工くわく  
靈山の釈迦のみまへに契りてし⑤※しんによ真如くちせずあひみつるかな

婆羅門僧正歌を返していはく、

※かびらゑ伽毘羅衛にともに契りしかひありて文殊⑥もんじゆ御みかほ貌みかほあひみつるかな

といひて、ともにみやこにのぼり給ひぬ。

(『三宝絵』による。ただし、本文の一部を省略した)

※講師……法会のとき、高座に登つて經典を講説する僧

※闘伽一具……仏にそなえる清らかな水を入れる仏具（闘伽）など、供養に用いる仏具一式

※靈山……釈迦が説法を行つた地である靈鷲山りょうじゆさんのこと

※真如……仏教における絶対不变の真理

※伽毘羅衛……釈迦の生誕地

問一 傍線部①の行つたこととして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 行基に呼び止められて池の前で立ち止まつた
- 2 故郷でも忙しそうなを心配し食事をとらせた
- 3 行基を引き留めて魚の刺身を強引に食べさせた
- 4 魚の刺身を口にしたもののすぐに吐き出した

1

問二 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 僧に対し、ふざけた愚かな行いをしたことを反省した
- 2 高僧への悪ふざけに対する報いをくらうことになった
- 3 出来心から殺生の罪を犯してしまったことを後悔した
- 4 不思議な力で生み出された小さな魚を食べようとした

問三 空欄  3

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ゆかしき
- 2 あだなる
- 3 いぶせき
- 4 たへなる

問四 傍線部③の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 私は外国から来られる大師にこそお仕えするべき者なのです
- 2 外国から来る大師が講師の役を十分にお勤めするはずです
- 3 私などは講師の任に当たらせていただくべきではありません
- 4 外国の大師を行基様の配下にお付けするのがよいでしょう

問五 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 外國の大師を迎えるために集まつた人々の船は、行基の供えた仏具に守られつつ西へと進んだ
- 2 香とともに波の上にまかれた花は、乱れ散りながら潮に乗つて遠い西の海へと流れ去ってしまった
- 3 閻伽一具をそなえて海に浮かび立つた行基は波に乗つて西へ行き、大師の舟を見つけて戻ってきた
- 4 行基が海に浮かべた仏具一式は、大師を難波津に導き入れるべく一そろいのまま西の海へと行つた

問六 傍線部⑤と同じ働きの語を含むものとして、最も適切なものを次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 6 1 雪をうれしと思ひはべりしに、  
2 なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。

- 3 いかにせましと思ひて、のぞきて見れば、  
4 とりたててはかばかしき後見しなければ、

問七 傍線部⑥が指す人物として、最も適切なものを波線部ア～エの中から選び、その番号をマークせよ。

- 7 1 ア 天皇      2 イ 行基      3 ウ 菩提      4 エ 釈迦

問八 本文の内容と合致しないものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 8 1 諸国を渡り歩いて仏法を説き土木事業も手がけた行基を民衆はこよなく慕つた  
2 天皇は東大寺建立にあたって行基を供養の講師に任じようとしたが固辞された  
3 行基は前世に菩提と交わした堅い約束が果たされ無事に再会できたことを喜んだ  
4 南天竺から来日した婆羅門僧正は東大寺の大仏の尊顔を拝する榮誉を歌に詠んだ

〔三〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔三〕の □ 1 から □ 8 までとする。

私が大学に入学する頃、世間には大学に入るとバカになるという「常識」がありました。<sup>①</sup>こうしたことと言うのは、世間で身体を使つて働いている人たちでした。そうした発言の真の意味は、いまではまったくわからなくなつてしまつたと思います。座つて本を読んではいるが、生きた世間で働くのが下手になつてしまつ。これはそういう意味だったはずです。こうした記憶があるから、私はいまでも身体を多少でも動かすのです。

座つて机の前で学べることもたしかにあります。しかし応用が利くことは「身についた」ことでしかあり得ません。

日本の教養教育がダメになつたのも「身につく」ことをしなくなつたからでしょう。

私が東京大学出版会の理事長をしていた時、一番売れたのが『知の技法』という本です。知を得るのにあたかも一定のマニュアルがあるかのようなものが、東大の教養学部の教科書で出て、ベストセラーになりました。

この本はなぜ売れたのか。知が技法に変わつたからです。技法というのはノウハウです。どういうふうに知識を手に入れるか、それをどう利用するかというノウハウに、知というものは変わつてしまつた。

しかし、教養はまさに身につくもので、技法を勉強しても教養にはなりません。ただ勉強家になるだけです。それを昔は「畳が腐るほど勉強する」と言いました。それでは運動をコントロールするモデルは脳の中にできあがりません。

知識が増えても、行動に影響がなければ、それは現実にはならないのです。江戸時代には陽明学というのがありました。当時の官学は朱子学で、湯島聖堂がその本拠地です。

林大学頭<sup>はやしだいがくのかみ</sup>といふ東京大学総長のような先生がいて、畠の上に座つて、先生の講釈を聞く。朱子学にはそんなイメージがあります。

陽明学はそれとは違います。知行合一<sup>ちこうごういつ</sup>を主張する。知ることと、行なうことは一つだ、一つでなければいけない。ここで言う知は文であり、行は武のことですから、文武両道と知行合一は同じことを言つています。

一般に、知ることは知識を増やすことだと考えられています。だから「武」や「行」、つまり運動が忘れられてしまう。

知ることの本質について、私はよく学生に、「自分ががんの告知をされたときのことを考えてみなさい」と言つていました。「あなたがんですよ」と言われるのも、本人にしてみれば知ることです。「あなた、がんですよ。せいぜい保つて半年です」と

言われたら、どうなるか。

③ 宣告され、それを納得した瞬間から、自分が変わります。世界がそれまでとは違つて見えます。でも世界が変わったのではなく、見ている自分が変わつたんです。つまり、4 とは、自分が変わることなのです。

自分が変わるとはどういうことでしょうか。それ以前の自分が部分的に死んで、生まれ変わつていています。

『論語』の「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」という言葉があります。朝学問をすれば、夜になつて死んでもいい。学問とはそれほどにありがたいものだ。普通はそう解釈されています。でも現代人には、ピンとこないでしょう。朝学問をして、その日の夜に死んじやつたら、何の役にも立ちませんから。

私の解釈は違います。学問をするとは、5 こと、自分の見方がガラツと変わることです。自分がガラツと変わると、

どうなるか。それまでの自分は、いつたい何を考えていたんだと思うようになります。

前の自分がいなくなる、たとえて言えば「死ぬ」わけです。わかりやすいたとえは、恋が冷めたときです。なんであんな女に、あんな男に、死ぬほど一生懸命になつたんだろうか。いまはそう思う。実は一生懸命だった自分と、いまの自分は「違う人」なんです。一生懸命だった自分は、「もう死んで、いない」んです。

人間が変わつたら、前の自分は死んで、新しい自分が生まれていると言つていいでしよう。それを繰り返すのが学問です。ある朝学問をして、自分がまたガラツと変わつて、違う人になつた。それ以前の自分は、いわば死んだことになります。それなら、夜になつて本当に死んだからつて、いまさら何を驚くことがあるだろうか。『論語』の一節は、そういう反語表現だというのが私の解釈です。正しいかどうかはわかりません。

確固とした自分があると思い込んでいるいまの人は、この感じがわからない。むしろ変わることはマイナスだと思つていま  
す。私は私で、変わらないはず。だから変わりたくないのです。それでは、知ることはできません。

でも、先に書いたように、人間はいやとうなく変わっていきます。どう変わるかなんてわからない。変われば、大切な物  
も違つてきます。だから、人生の何割かは空白にして、偶然を受け入れられるようにしておかないと(5)い  
ません。

（養老孟司『ものがわかるということ』による。ただし、小見出しを省略した）

問一 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 大学で学ぶと高校までの学習内容を忘れ去つてしまふ
- 2 身体を使つて働いている人からひがまれるようになる
- 3 バカ正直に働くことの重要性を見失つてしまう
- 4 座学の重視は、実社会での働きを下手くそにする

問二 傍線部②の事象を筆者はどのように思つてゐるか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 2 1 自分が東京大学出版会の理事長だった当時に最大のベストセラーを生んだことを成果として誇らしく思つてゐる
- 2 自分が東京大学出版会の理事長だった当時のベストセラー刊行を當利主義に走つたと受け取られるのを嫌つてゐる
- 3 知をどこか手軽なノウハウに変えてしまう傾向を黙認して先導した張本人と見られることをもつぱら恐れています
- 4 簡単に知識を手に入れるための技法が知であると思わせた本がベストセラーにもなつたことを不本意に感じてゐる

問三 傍線部③はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 3 1 がんの宣告で自身の死がリアルとなり、死後の準備を急ぐことになるから  
2 寿命の宣告によって従来の当たり前だったことに終止符がうたれるから  
3 死の宣告を受け入れ、余生にさらなる別の楽しみを求めることになるから  
4 周囲の風景が一変することによって、生の意識が改まることになるから

問四 空欄

4

- 1 見る 2 知る 3 宣告 4 世界

問五 空欄

5

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 5 1 一皮むける 2 思い半ばにすぎる 3 驚天動地のような 4 目からウロコが落ちる

問六

傍線部④はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 6 1 学ぶことを筆者は死を繰り返すことと捉え、それゆえ実際の死も動搖するほどのことではないと解するということ  
2 筆者の考えでは朝に学んで夜に死んでしまうのでは学びが無意味になるので、そんな解釈には反対であるということ  
3 学問を人間の生死に直結させるのはどう見ても極端過ぎて、筆者としては違和感を覚えずにはいられないということ  
4 どれほど学問がありがたくても実際に命を落とすほどかといえば、筆者にしても簡単な問題とは思えないということ

問七 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 学ぶことは新たな謎の発見だから、将来を生きる上でその謎に対応する余力を残しておくことが不可欠だ
- 2 人生の先行きは不安定で誰にもわからないからこそ、先入観を持たず何事も決めつけないことが肝要となる
- 3 学びを通して生まれ変わったことを必然だと考えずに、余裕を持って新たな自分を受けとめる態度が必要だ
- 4 固定した価値基準に縛られることなく、学びによる自らの変容がいつでも可能になるようしておくべきだ

問八 本文の主旨として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 真の教養とは畠が腐るほど熱心に勉強を続けて得られるものであり、学問をするとは死ぬ気で勉強することである
- 2 真の教養とは脳の中に運動を制御するモデルを作り出すことであり、学問をするとは世界の見方を磨くことである
- 3 真の教養とは知ることと行うことが一つになつたものであり、学問をするとは自分自身が変わり続けることである
- 4 真の教養とは発言や行動を制御する哲学のもとで応用される知であり、学問をするとは知の本質を学ぶことである

(以下 余白)